君が思い出になる前に。

刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君が思い出になる前に。

【Ｎコード】
Ｎ３０１８Ｏ

【作者名】
刹那

【あらすじ】
ーーー忘れないで。二人重ねた日々は、この世に生きた意味を超えていたことを・・。

ーー愛し合っていた恋人の死。
残っていたのは、絶望と、それから、大きな大きな彼への愛。
どうする事もできないけれど、それでも生きていく、そんな彼女と彼のお話し・・。
→・・暗い感じですが、そんなネチネチしてません！そのへんの

ご心配は無用です（＞＜；）
スピッツさんの歌を原作にしています。
暇つぶしに読んで頂けると大喜びして踊り始めます。
宜しければ・・（ーwー；）／

――痛い。
身体中が痛い。
・・骨が、背中が、足が、・・全てが、痛い、痛い、痛い・・
　恥じとか、そんなのもう関係無いくらい痛くて、涙が出る。
歯を食いしばろうと思ったけど、そんな力さえ出ない。
とにかく痛い。
痛い痛い痛い痛い・・
　痛くても、何も動かない。
苦しんで身を捩る事も、叫び声をあげる事も出来ない。
ただ、涙を流す事しか。
・・それさえも、呼吸が乱れ、さらに激痛が身体中に響くのだ。

・・・・

「――楓(かえで)!!楓(かえで)!!!私だよ?!!」
遠くで聴こえる渚(なぎさ)の声。
あぁ、やっぱり綺麗だな・・。
「楓。気が付いて。私だよ?」
・・体中の全ての力を振り絞って、俺は瞼を開ける。
渚を心配させたくない。
「楓!大丈夫?!ごめん、ありがと、楓、楓・・」

何度も俺を呼ぶ渚。
目にいっぱいの涙をためている。

（泣くなよ）

声にしたかったけど、俺の口は言う事をきいてくれなかった。
声が出ない。
喉が痛い。

・・朦朧とした景色の中で、渚の姿だけが見える。

お願い、生きて。

・・声が聴こえる。

（俺は、生きるよ。渚が望むなら。俺は生きるよ。渚とまだ一緒にいたいから。）

声にならない声で、そう渚に伝える。
かすかに開いた目で、優しく渚を見つめた。

「楓！」

渚が、俺の名を呼ぶ。
楓（かえで）って名前は女みたいで嫌だったけど、渚が呼んでくれたから、好きになれたんだ。

そう言ったら君は照れくさそうに笑っていたね。
頬を桃色に染めて、嬉しそうに笑っていたね。

俺は、そんな渚の笑顔が好きだよ。
渚の笑顔は、世界の全ての色を変えてしまうんだ。
水の色も、風の色も、空の色さえも、美しく染めてしまうんだ。

「楓、楓、生きて。目を開けて？」

渚がそう叫ぶ。

俺は、体中の痛みを感じながら、自分の死期を悟った。

（ごめん、もう駄目かもしれない。）

心の中で、そう君に優しく言った。
悲しいけど、苦しいけど、もう別れの時が、きたかもしれない。

「お願い！お願いだから生きて！！それだけでいいから！それ以外の何も求めないから！！！」

渚が大きな声で叫ぶ、
俺は、力がつきてそのまま瞳を閉じた。

体中痛くて、全てがズキズキと痛んでいたけど、心は何故か穏やかだった。

・・・渚の声を聴きながら、よくケンカしていたな、と思い出す。
しょうもない事でケンカして、素直になれず、謝れなかった。
でも、大抵は俺が先におれてたかな。

渚の顔を見ると、そんなプライドなんかどっかに吹っ飛んでしまうんだ。

俺が謝ると、渚も謝ってくれた。

「私こそ、ほんとごめん」

そう言って、申し訳なさそうに俺をみていた。

そんな渚を見ると、つい抱きしめたくなるんだ。

優しく、抱きしめてあげたくなるんだ。

・・・・

身体の痛みは、もっと強くなって、俺の全てを支配した。

・・身がもたないくらいの痛みが俺を襲う。

ドクン

心臓が一回だけ大きな音をたてて、プツリと何かがきれる音が聞こえた。

「楓ぇぇーーーー！！！」

ーーーーー・・君の声も、笑顔も、耳も、鼻も、唇も、もう何も見えない。

・・感じられない。

ーー・・ごめん、渚。

・・俺はそのまま意識を失った。

どこか、遠くへ行く為の船へ乗り込んで、その流れに身を任せた。
――そこは、もう何も感じない未知の世界。
音も、色も、匂いも、何も無い、だけど自然と心地良い所。
出来れば渚と一緒が良かったけど、それはわがままかな・・
――渚、俺の分も、幸せに生きて。
さよなら。
こっちで君の事待ってるよ。

・・・・

――ある病院の一室で、その少年は息を引き取った。
それは、数人しか知らない出来事で、だけど、とても大きな出来事。
・・少年の傍で、一人の少女が泣きながら、何かを、・・まるでその少年に語りかけているかの様に、呟いていた。
「楓、私の為に、死ぬなんて・・・・私をかばって死ぬなんて、そんなの無しだよ。・・お願いだから、目をさまして?・・・・お願いだから・・・」
それから後の音は、泣き声だけ。
小さくて、でも重い、少女の泣き声だけだった。

・・・・

ーーー帰り道、涙で目が腫れた少女が一人で歩いていると、路上で誰かが歌っていた。
少女は傍のベンチに腰を掛けて、その曲に耳を傾け、ゆっくりと目を瞑った。

・・・・

あの日もここではみ出しそうな君の笑顔を見た
水の色も風のにおいも変わったね
明日(あす)の朝　僕は船に乗り、離ればなれになる
夢に見た君との旅路は　叶わない

きっと僕ら　導かれるままには歩き続けられない
二度と　これからは

君が思い出になる前に　もう一度笑ってみせて
優しいフリだっていいから　子供の目で僕を困らせて

ふれあう度にけんかばかりしてた
かたまりになって坂道をころげてく

追い求めた影も光も　消え去り今はただ
君の鼻と耳の形が愛おしい

忘れないで　二人重ねた日々を
この世に生きた意味を超えていたことを

君が思い出になる前に　もう一度笑ってみせて
冷たい風に吹かれながら　虹のように今日は逃げないで

君が思い出になる前に　もう一度笑ってみせて
優しいフリだっていいから　子供の目で僕を困らせて

君が思い出になる前に　もう一度笑ってみせて
冷たい風に吹かれながら　虹のように今日は逃げないで

・・・・

ベンチに持たれかけながら少女はただ涙を流し続けた。

「楓（かえで）・・」

そうポツリと呟いてから、優しく、しかし悲しそうな表情で、また涙を零した。

・・風が、その少女の頭をまるで撫でているかの様にフワリと通り過ぎ、そしてまた新しい風が、・・大切そうに、愛おしそうに、少女を包み込み、それからベンチの傍にあるサクラの木を揺らした。

・・・・

ーーハート型のサクラの花びらが、少女の手に乗っかり、彼女は驚いた様にその花びらを見つめた。
・・それから、ふんわり笑って、ベンチから立ち上がると、さっきとは違う足取りで、自分の家まで帰っていった。

・・そしてその手にはしっかりとサクラの花びらが大切そうに握られていた。

（・・・楓（かえで）、傍にいるんだね、私の傍に、ちゃんといてくれてるんだね。・・・ねぇ楓（かえで）・・私はまだこの悲しみに耐えられないけど、それでもちゃんと生きていくよ。楓（かえで）の分も、しっかりと人生を歩んでいくよ。だから、それまでは、お願い。傍に居て？）

ーーーうん。分かった。頑張れ渚（なぎさ）

ーーどこかで、誰かの声がした。

（後書き）

ここまで読んで下さり本当に有難うございます！！！m（_ _）m

あらすじ通り、ただいま踊っていますw

このページを開いてくださった貴方に、心からの感謝を込めて・・・

（T_T）

｛ありがとうございました！！。＋。（；？；）。＋。｝

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3018o/

君が思い出になる前に。

2010年10月15日23時27分発行